

## 「可愛くないイエス少年」

「世界で一番醜い生き物は、中学生男子だ」と言った小説家がありました。それは誰だと言われると、ちょっとうる覚えで、自信をもってお伝えできないんですが。なので、こういう公の場で断言できず、申し訳ないとも思っています、でも、どこかの小説家が言った、この「世界で一番醜い生き物は、中学生男子だ」という言葉が非常に鮮烈に感じられたので、その言葉だけ、40 手前になった今でも忘れないでいます。まあ、自分の中学生時代を振り返って、確かにその通りだなあ、と思ったに過ぎないというだけのことです。だから、今を駆け抜ける現役の中学生男子を捕まえて、「キミは世界で一番醜い生き物だよ」と言うつもりは、もちろん全然ありません。ただ、もしも色々な感情や願望が纏れに纏れて、自分の事を醜いと感じている中学生男子に出会ったなら、教えてあげたいことが一つあります。それは、「バロット」という卵料理の話です。

「バロット」とは、アヒルの卵を茹でただけの、いわゆる「ゆで卵」ですが、私たちが良く知っている鶏卵の「ゆで卵」と大きく異なるのは、それが有精卵であり、また、孵化直前のものを茹でているということです。フィリピンやベトナムで食されている「バロット」は、滋養強壮に良いとされ、普通に屋台や料理店で提供されているそうです。酒のつまみにもなると言います。ただ、皆様のご想像の通り、孵化直前のゆで卵ですから、その殻の中身は、一言で言えば、醜いです。その文化圏の人には悪いですが、正直、私は無理です。雛の形がほぼ出来上がっており、羽や嘴も確認できます。それが丸く半透明に茹っています。食欲は、湧きません。

鶏にしろ、アヒルにしろ、卵から孵った後のヒヨコは、丸くてフワフワしていて非常に可愛らしいものです。醜いという言葉は当てはまりません。「醜いアヒルの子」というアンデルセンの童話

に基づいて考えるなら、白鳥のヒヨコよりも、アヒルのヒヨコの方が余程可愛いらしいようなので、孵ってしまえば、アヒルの子の可愛さは最強なのかも知れません。しかし、孵る直前の姿は、「バロット」という料理を調べてもらえれば分かる通り、非常に醜いものです。

つまり、それっていうのは、可愛いヒヨコになる前には、卵の殻の中で、そういう醜い姿に一度ならないといけないってことなんですよね。この「バロット」という卵料理の話は、自分のことを醜いと感じている中学生男子、だけでなく、すべての悩める人に知ってもらいたいと思います。成長する過程では、あるいは何者かに成ろうと努力する過程では、必ず醜いと感じる時があるということ。しかし、その醜さを経ないと辿り着けない生き生きとした魅力や素晴らしさがあるということを知っていて欲しいと思います。そして、自分の子が「世界で一番醜い生き物」になった時、その醜さの意味を理解しようと努力できる親でありたいと個人的には思っています。

で、なんでこんな話をしているかと言いますと、今日の聖書箇所に出て来るイエス様って、全然可愛くないよねってことです。さすがに「醜いよね」と言ってしまうのは、一クリスチャンとして、葛藤があるので言いませんが……。あの最初のクリスマスの日、マリアさんやヨセフさん、羊飼いや天使や占星術の学者たちの真ん中で、飼い葉桶に眠っておられるイエス様は、間違いなく可愛かったかと思います。そして、成人されて多くの人に慕われた大人のイエス様も優しくて魅力的であったはずです。しかし、その赤ちゃんイエス様と、大人のイエス様の間であって、まさに中学生の入り口 12 歳のイエス様は、どうでしょうか。確かに賢くはあったようです。学者たちを相手に話を聞いたり、質問をしたりして周囲の人を驚かせたと書かれてあるので、とてもスマートな 12 歳であったことは間違いありません。しかし、私も男の子の親なものですから、色々と自分に重ねて考えてみますと、ちょっとこのイエス少年の言動は、目に余る。百歩譲って、自分の息子がいなくなったことに気付かない親は責められるべきでしょう。しかも、まる 1 日気付かなかったという

わけですから、弁解の余地はありません。マリアさんも、ヨセフさんも反省しないといけない。けれど、3日間かけて、ようやく見つけた自分の息子から、「わたしがここにいるのは当たり前だということ、知らなかったのですか」なんて言われたら、確実に怒ります。「親の心配を何だと思っているのか」と言いたくなります。と言うか、「その言い草は、逆に痛々しいぞ」と、私なら言うかも知れません。

もっとも、このイエス少年がいなくなった話が、すべて創作物語であるなら、そう真面目に考える必要もないと思います。しかし、私たちが教会でも幼稚園でも順を追って何度も何度も何度も読み返しているアドベント、クリスマスの物語から続く「大人になる前のイエス様の物語」に、このようなお話が組み込まれているのには、何か意味や目的があるのか、と考えるわけです。この生意気で可愛さのかけらもないイエス様を、なぜ、ルカによる福音書は伝えているのでしょうか。イエス様は、少年の時から完成された知恵と人格を持っていたことを伝えるためでしょうか。しかし、古い聖書の約束には、「父母を敬え」というものがあります。育児放棄や虐待という悲劇があることを弁える現代の私たちは、幾分かこの「父母を敬え」という約束について、差し引いて考える必要はあります。しかし、今から2000年前を生きた知恵ある賢いイエス少年が、この古い重要な約束を知らないはずは無いし、この両親がイエス少年にとって害悪でしかない毒親と断定するほどの状況証拠も乏しいでしょう。また、イエス少年がすでに完成された人格を持っていたとすれば、目の見ない人、足の萎えた人、罪悪感に苦しむ人に対して、お示しになった、あの深い愛と慈しみを、失われた羊や銀貨を見つけるよりもさらに大きな動揺と喜びを感じたであろう、自分の両親に対して向けないのは、ちょっと不思議です。

このような「可愛くないイエス少年」の話を解釈する上では、3通りの道があります。一つ目は、先ほど「このイエス少年がいなくなった話が、すべて創作物語であるなら、そう真面目に考える必

要もない」と言いましたが、実のところ、このお話は史実と言うより、本当に創作物語である可能性の方が高いと言うことです。このお話の元ネタは、サムエル記に登場する非常に賢かったサムエル少年が、神殿に住み込み仕える祭司エリさんのもとで暮らし始めたという出来事です。ちょうど、こっちに掲げてある月間聖句が書かれている箇所の前にあった出来事ですね。この福音書を書いたルカという人は、旧約聖書の比較的有名な物語であるサムエル少年のお話を下敷きにして、「神殿で過ごす賢いイエス少年」の物語を書き残したのです。それは、これから続くイエス様の物語が、古い旧約聖書と十分に関連していることを示すためでした。読者に対して「この話、なんかあれに似ているな」という感覚を引き起こさせることで、自分の書いた福音書への興味関心を促したということです。それが、この「可愛くないイエス少年」を解釈する上での、一つの道です。

2つ目の道は、「しかし、両親にはイエスの言葉の意味が分からなかった」という50節の一言に集約されています。これは、クリスチャン誰しもが一度、のみならず、きっと何度も抱くであろう「イエス様は、多分良いこと言っているんだろうけど、でも、よく分からん」という感想について、「それでいいんだよ」と言って肯定するものです。イエス様の仰ることって、両親であるマリアさんやヨセフさんにも、よく分からなかったんだなあ、と。やっぱり、まあ、そういうもんなんだよな、と。これは、イエス様の人知を超えた卓越性を伝える一つの形です。この聖書を読んで、イエス様が語られた御言葉を聴いて、理解に苦しむことがあったとしても、それはイエス様の両親もそうだったし、仕方ないなんだ、ということです。ただ、先週の説教でもお伝えした通り、その理解に苦しむ御言葉、なんだけど、埃を被るほどに長い時間、胸にしまっておくことで、いつの日か、味わい深い御言葉に変わって行く可能性はゼロじゃない、と信じていたいと思います。今は理解できないけれど、マリアさんのように「心に納めて」過ごす中で、もしかしたら、良い具合に発酵してチーズか、ワインか、あるいは“へしこ”のようになる、かも知れない、と。そもそも、この聖書

自体が、長い歴史の中で多くの国の、多くの地域にあった様々な思想文化に影響され、“醸される”ことによって、発酵・熟成したヴィンテージワインみたいなものとも言えるわけですから。

3つ目の解釈の道は、冒頭お話しした「世界で一番醜い生き物は、中学生男子だ」ということです。つまり、我らの主イエス・キリストも、そういう時期を過ごされたのだ、と。スマートであることに憧れ、大人になろうと背伸びをし、ちょっと大人に認められて、自分は大人なのだと思われ、結果、親に迷惑を掛けたり、心配を掛けたり……。イエス様にも、そういう時期があったんだなあ、と。しかし、だからこそ、恥ずかしく、醜い姿をさらすこともある、私たちの、その居た堪れない気持ちも、イエス様は、きっと分かってくれると思うのです。また、両親に対して生意気を言いながらも、イエス様は、その後、「両親に仕えてお暮しになった」と言います。それは、自分の成長を過大に評価しつつも、結局は、親や大人の庇護の下で暮らす他ない、世の多くの子ども達と同じです。イエス様にも、そんな時期があったのです。貧しい馬小屋という社会の底辺にお生まれになったイエス様は、その人生の少年期も、何ら高尚でも立派でもなく、多くの子ども達のように、親に迷惑をかけ、心配をかけ、きっと後から振り返ってみれば、「あの頃の自分は恥ずかしかったなあ」と反省するような、そんな日々を過ごされたのです。でも、だからこそ、私たちの良き理解者であり、良き友人になってくれる、ということです。

キリスト教は、自分の至らなさ、罪深さ、ダメダメさを自覚して生きることを勧めます。それは、一見して後ろ向きの、根暗な感じがしますが、その実、自らが抱えるそれらの「醜い姿」が、いずれ「喜び」や「素晴らしさ」に変わることを信じています。このダメなところも、この反省すべきところも、この失敗も、この過ちも、きっと神様が、良い感じに繕い、補い、いつの日か、私のために、また人のために、素晴らしく有意義な形に整えてくださるに違いない、と。「可愛くないイエス少年」は、そのありのままの姿を通して、時に自らの至らなさ、醜さに悩む私たちに向けて、

「大丈夫。それは成長している証だ。私もそうだった」と教えてくださっているのです。イエス様  
って、そういう格好悪い姿によっても励ましてくださる、そんな方なのです。ゲッセマネの祈りや、  
十字架上での叫びもそうですよね。

私達の生きるつらさを知り、悩みを知り、そして、聖書を通して語り掛けてくださっている主イ  
エス・キリストに、今週も心を開いて、その御言葉に耳を傾けて歩んで参りましょう。お祈りを致  
します。

神様。

今日も私たちのために、尊い日曜日を、安息日をお与えくださり、ありがとうございます。1 週  
間の働きを終えて今日を迎えた私たちは、その7日間を過ごす中で、様々な思いを抱え、願いを持  
ち、あなたへの祈りを備えて参りました。今、ここに集った私たちの思いと願いと祈りを、どうか  
あなたが掬い上げてください。そして、今日から始まる新しい1週間を、自信と喜びと幸せで満た  
してください。失敗の先に成功があることを、反省の先に満足があることを、醜さの先に素晴らし  
さがあることを、どうか、私たちに力強く示してください。イエス様もそうであったように、私た  
ちも、自らの至らなさや過ちを踏みしめ、足がかりとして、自分のために隣人のために、成長して  
いくことができますように。支え導いてください。このお祈りを、我らの良き友であり、良き理解  
者である、主イエス・キリストの御名を通して、あなたの御前にお捧げ致します。